

第6話「お父さん、手術してよっ！！」

母「聞いてよ、美沙！ お父さん、手術は断るって！ 胃がんなのに！」

電話の向こうで、母がまくしたてた。

美沙「お父さんが、がん…？」

私は、両親と一緒に医師からの説明を聞くため、実家のある●●に戻った。

母「親戚の俊夫さんがね、胃がんの手術をした後、すごくつらそうだったのよ。

食事やお酒も制限されて、お父さん、そんなの嫌だから手術はしないって。」

美沙「俊夫さんが手術したのって、10年以上も前でしょ！」

今は、手術だって、治療だって変わってるわよ！」

父は、手術が怖くて、ゴネているに違いない。

医師「おそらくIB期という段階の胃がんです。

手術の必要がありますが、完治も望めます。

手術したからといって、食べてはいけないものもありませんし、

手術前と変わらない生活を送っていただけるはずですよ。」

父・大造「手術はお断りします」

父は、かたくなだった。

医師「大事なことです。ご家族でよく話し合ってください。

がん相談支援センターで、相談してみてもいいですか？」

私たちはその足で、がん相談支援センターに向かい、

相談員の中川さんに、これまでのことを説明した。

中川「ご家族の心配は、ごもつともですね。

では、お父様はどうですか？ 最終的に決めていただくのはご本人ですよ。」

私は驚いた。

病院内のセンターだから、手術を受けるよう、

父を説得してくれるものだと思い込んでいたのだ。

中川「みなさんが安心して、納得できるよう、

お手伝いするのが私の役割ですから。」

父・大造「手術はしないって言っただろう！」

父が大きな声を出した。

美沙「お父さん！ ワガママ言っていないで、手術を受けてよ！」

私は、思わず出た自分の言葉にハッとした。

私が父に伝えたいのは、そんなことではない…。

無理やり、手術を受けさせたいわけでもない…。

美沙「私は…、お父さんに元気になって欲しいだけなの…。」

中川さんが静かに父に語りかけた。

中川「お父様思いの娘さんですね。」

父が照れくさそうにうなずいた。そして…。

父・大造「わかったよ、美沙。おまえの気持ちは、よく分かった。

中川さん。手術のことや、その後のこと、についても、

ここで、聞けるんですか？」

中川「はい。もちろんです。」

もつれていた家族の気持ちが、ほぐれていくのを感じた。

病院の外に出ると、雲ひとつない青空が広がっていた。